

目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力を育てる国語科学習指導の工夫 — 方略集の作成と活用を通して —

三原市立沼田西小学校 藤村 郁文

研究の要約

本研究は、目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力を育てる国語科学習指導の工夫について考察したものである。各種学力調査や文献研究から、本研究における「目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力」を定義し、それらの力を育てるための手立てとして、第4学年において、方略集の作成と活用を行った。「目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出すスキル」「取り出した情報を使って書くスキル」を取り出し、児童が自分の言葉でまとめ、方略集として整理した。さらに、新たな課題解決の場を設定し、取り出したスキルを基に実際に課題解決を行うことを通して、スキルの有効性を実感できるようにした。その結果、目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力が高まった。このことから、児童が方略集を作成し活用する学習活動は、目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力に有効であるといえる。

I 主題設定の理由

中央教育審議会答申(平成28年)⁽¹⁾では、急速に情報化が進展する社会の中で情報活用能力、物事を多面的・多角的に吟味し見定めていく力などを体系的に育むことの重要性が指摘され、小学校学習指導要領(平成29年告示)⁽²⁾に「情報の扱い方に関する事項」が新設された。これは、高度情報社会を生き抜く上で必要な情報を取捨選択する力を身に付けさせることが求められているといえる。

所属校では、平成30年度の全国学力・学習状況調査(以下「全国学力調査」とする)⁽³⁾国語B[2]二目的に応じ、複数のテキストから必要な情報を取り出して書く問題における正答率は33.3%であった。詳しく見ると、目的に応じていない、二つの資料に共通する言葉や内容に着目していないなどの課題が見られた。つまり、目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書くことに課題があるといえる。このことは、学力調査に関わる報告書でも、継続的な課題として挙げられている。これまで、情報を取り出して書く際に必要なスキルを示した指導事例はあるが、児童に有効性を実感させ、方略化を目指したものではない。

瀬尾美紀子・植阪友理・市川伸一(2008)は、学習者が方略を自発的に利用していないこと⁽⁴⁾を指摘し、その要因として、方略に関する知識をもつてい

ないこと、方略の有効性を実感していないことを挙げている。また、場面によって適切な方略を使い分け運用させるためには、方略に関する適用条件の知識の獲得、方略を使いこなす十分なスキルの獲得が必要であると述べている⁽⁵⁾。つまり、学習者に課題解決の過程で用いた方略を自覚させるとともに、その有効性を実感させること、運用に必要なスキルを身に付けさせることの両面から指導する必要性を示している。

本研究では、目的に応じて必要な情報を取り出して書く際のスキルを理解させ、その学習を通して方略について話し合い、方略集としてまとめる。それを活用して書くことで、方略の有効性を実感させる。この反復を通して、目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力を育てることができると考え、本研究題目を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力について

(1) 目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力とは

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編(平成30年)(以下「29年解説」とする)⁽⁶⁾の2〔思

表1 目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力に関する問題分析

	「全国学力調査」（B問題）			「基礎・基本」	
	平成30年度 B[3]二	平成29年度 B[2]三	平成28年度 B[2]二（1）（2）	平成29年度 設問五3	平成28年度 設問五1
目的	おうちの人に（相手）むし歯を防ぐ効果に着目して（着目点）おすすめする文章を書く（目的）	同じ学年の友だちに（相手）水やりの大変な理由に着目し（着目点）水やりの協力を依頼する文章を書く（目的）	学級のみんなに（相手）早寝早起き朝ご飯運動の取り組みについてアンケート結果に着目し（着目点）活動報告文を書く（目的）	逆上がりができるように友達に（相手）体を起き上がらせる点に着目し（着目点）アドバイスする文を書く（目的）	すみかに合わせたくらしと飼育の工夫に着目し（着目点）オランウータンの飼育の工夫を紹介する文を書く（目的）
複数の資料	・おすすめする文章（文章） ・保健室の先生の話から分かったこと（メモ）	・中学生からのアドバイス（文章）	・次の日に学校がない日は学校がある日に比べて、寝る時刻が2時間以上遅くなることはあるか（帯グラフ） ・寝る時刻が2時間以上遅くなる理由は何か（表）	・つまずきチェック（文章） ・おすすめ練習法（文章） ・先生のコメント（文章）	・飼育係の人の話（文章） ・世界中の動物たちについて（文章） ・動物の飼育の工夫（文章）
必要な情報を取り出す	・共通する言葉に着目 ・関係ある内容に着目	・理由となる文に着目	・条件に合う数値に着目	・関連がある見出しに着目	・共通する言葉に着目
取り出した情報を使って書く	・原因と結果を関係付けて書く	・理由と事例を区別して簡潔に書く ・整理して書く	・グラフと文章と関係付けたり自分の考えを入れたりして書く	・石川さんの書き方を基に、情報を関係付けて書く	・赤田さんの書き方を基に、情報を関係付けて書く

考力、判断力、表現力等】B書くこと第3学年及び第4学年には、「相手や目的を意識して」、第5学年及び第6学年には、「目的や意図に応じて」書くことが求められている。「特定の人に対して文章を書くのか」「何のために書くのか」「読み手はどのようなことを知りたいのか」「場面や状況を考慮して」といったことを念頭において書くことが求められている。

さらに、目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出す力とはどのような力なのか明らかにするため、平成28年度「全国学力調査」⁽⁷⁾、平成29年度「全国学力調査」⁽⁸⁾、平成30年度「全国学力調査」、平成28年度と平成29年度「基礎・基本」定着状況調査（以下「基礎・基本」とする）⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾の問題分析を行い、表1にまとめた。

平成30年度「全国学力調査」B問題は、かみかみあえのむし歯を防ぐ効果に着目し、おうちの人におすすめするという目的に応じて文章を書くことが求められている。その際に、「紹介する文章」（文章）と「保健室の先生の話から分かったこと」（メモ）からむし歯を防ぐ効果に着目し、「よくかむこと」と「だ液がたくさん出て、口の中をきれいに保つこと」の二つの情報を取り出し、おすすめする文章にふさわしい言葉を用いて、これらを関連付けて書くことが求められている。

同様に、平成28年度と平成29年度の「全国学力調査」、平成28年度と平成29年度の「基礎・基本」でも、目的に応じて複数の資料から共通する言葉や関係のある内容に着目して必要な情報を取り出し、取り出した情報を関連付けて書くという共通点が見られる。

これらのことから、「目的に応じる」とは、「誰に対して」（相手）「何のために」（目的）「どのような点に着目して」（着目点）を意識することと

いえる。「複数の資料から必要な情報を取り出す」とは、種類の異なる文章から、共通する言葉や関係のある言葉に着目しながら読み、必要な言葉や文、数値に線を引いたり囲んだりしながら、必要な情報を見付けることである。「取り出した情報を使って書く」とは、目的に応じて取り出した情報を分類・整理したり、関係付けたりして目的に応じた形で書くことである。

以上のことから、「目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力」とは、目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書くすべての過程において、「相手」「目的」「着目点」を意識して、共通する言葉や関係のある言葉に着目しながら読み、必要な言葉や文、数値に印をつけて情報を取り出し、それらを分類・整理したり、関係付けたりして適切な形で書くこととする。

（2）目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書くために必要なスキルについて

目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書くために、どのようなスキルが必要になるかを明らかにするため、「29年解説」、平成28年度から平成30年度の全国学力・学習状況調査報告書（以下「全国報告書」とする）⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹³⁾、平成28年度から平成30年度の全国学力学習状況調査の結果を踏まえた授業アイディア例小学校（以下「アイディア例」とする）⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾、平成28年度、平成29年度の広島県学力調査報告書（以下「県報告書」とする）⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾の内容を整理し、表2にまとめた。

平成28年度から平成30年度の「全国報告書」では、学習指導に当たって、「何についてのグラフや表なのか確認する」「注目する言葉や数字が何を意味するのかを考える」「情報と情報との共通点や相違点に着目してまとめたり、見出しを付けたりする」「友達と吟味し合う」などの例が挙げられている。また、

表2 「29年解説」の指導事項、各種学力調査報告書に挙げられた指導のポイント等との関連

	情報の扱い方に関する事項	書くこと	読むこと	「全国報告書」(平成28年度～平成30年度)	「アイディア例」(平成28年度～平成30年度)	「県報告書」(平成28年度～平成29年度)
第一学年及び第二学年	ア 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解すること。	ア 経験したことや想像したことなどから書くことを見付け、必要な事柄を集めたり確かめたりして、伝えたいことを明確にすること。 イ 自分の思いや考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。 ウ 語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書く表し方を工夫すること。 エ 文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いを正したり、語と語や文と文との続き方を確かめたりすること。 オ 文章に対する感想を伝え合い、自分の文章の内容や表現のよいところを見付けること。	ア 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること。 ウ 文章の中の重要な語や文を考えて選び出すこと。	・友だちと吟味し合う。 ・注目する言葉や数字が何を意味するのかを考える。 ・情報と情報との共通点や相違点に着目してまとめて見出しを付けたりする。 ・情報からキーワード見付けて囲んだり、線でつなげたりする。 ・目的に応じて中心となる語や文に注目して要点をまとめて見出しをついたりして内容を整理する。 ・図表やグラフを活用する。	・具体的なゴールイメージをもたせる。 ・目的に応じて中心となる語や文に注目して要点をまとめて見出しをついたりして内容を整理する。 ・複数の資料を活用する。	
第三学年及び第四学年	ア 考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解すること。 イ 比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の示し方、辞書や事典の使い方を理解し使うこと。	イ 書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えること。 ウ 自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫すること。 エ 間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているかを確かめたりして、文や文章を整えること。 オ 書こうしたことが明確になっているかなど、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けること。 ア 相手や目的を意識して、経験したことや想像したことなどから書くことを選び、集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にすること。 ウ 自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫すること。	ア 段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えること。 ウ 目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約すること。 ア 目的を意識して、経験したことや想像したことなどから書くことを選び、集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にすること。 ウ 自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫すること。	・注目する言葉や数字が何を意味するのかを考える。 ・何についてのグラフや表なののか確認する。	・情報を整理し、それらを活用して再構成する。	
第五学年及び第六学年	ア 原因と結果など情報と情報との関係について理解すること。 イ 情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと。	イ 筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えること。 ウ 目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事実と感想、意見とを区別して書いたりするなど、自分の考え方方が伝わるように書き表し方を工夫すること。 オ 文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整えること。 カ 文章全体の構成や展開が明確になっているかなど、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けること。 ア 目的や意図に応じて、感じたことや考えたことなどから書くことを選び、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝えたいことを明確にすること。 イ 筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えること。 エ 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。	ア 事実と感想、意見などの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること。 ウ 目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして、必要な情報を見付けて、論の進め方について考えたりすること。			

平成28年度から平成30年度の「アイディア例」には、「目的や意図、相手等を明確にして書くこと」「情報からキーワードを見付けて囲んだり、線でつなげたりしながら考えていくこと」などが挙げられている。そして、平成28年度、平成29年度の「県報告書」では、「具体的なゴールイメージをもたせる」「目的に応じて中心となる語や文に注目して要点をまとめたり、小見出しをつけたりして内容を整理させる」「情報を整理し、それらを活用して再構成する」などの指導が必要であることが分かった。

表2から、「情報の扱いに関する事項」「書くこと」「読むこと」が互いに関連していることが分かる。第1学年及び第2学年を例にとってみると、「共通・相違・事柄の順序・重要な語や文を考えて選び出す」など、「目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く」際に重要なポイントが共通していることが分かる。また、同学年での関連だけでなく、次学年との関連もあることが分かる。指導内容を整

理し、意識して指導し、学習を積み重ねていくことが必要であるといえる。

表3 本研究で示すスキル

	目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出すスキル	目的に応じて取り出した情報を使って書くスキル
① (第一学年及び第二学年)	○目的に合った情報かどうかを考えながら必要な情報を探す。 ・共通する言葉に着目して、重要な語や文を選び出す。 ・共通・相違点に着目して、重要な語や文を選び出す。 ・時間の順序、事柄の順序に着目して内容を捉える。 ・繰り返し出てくる言葉に注目する。 ○関連のある箇所に印をつけたり、書き抜いていたりする。	・学習の具体的なゴールイメージをもって書く。 ・取り出した情報を必要な事柄を確かめて書く。 ・事柄の順序に着目して構成を考え書く。 ・語と語、文と文との続き方に注意しながら内容のまとまりが分かるように書く。
② (第三学年及び第四学年)	・様々な資料を活用する。 ・他に情報はないか考えながら情報を探す。 ・表やグラフが何を表しているのかを考える。 ・文章と表やグラフを関係付ける。 ・考え方と理由、事例と関係付ける。 ・中心となる語や文を見付けて要約する。	・目的や意図、相手を明確にして書く。 ・取り出した情報を比較・分類して伝えたいことを明確にして書く。 ・段落相互の関係に注意して書く。 ・自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして書く。
③ (第五学年及び第六学年)	・文章と図やグラフを関係付ける。 ・事実と感想、意見などの関係を意識する。 ・文章全体の構成を捉えて、要旨を把握する。 ・論の進め方について考える。 ・言い換えられている言葉はないか考える。	・取り出した情報を分類、関係付けて伝えたいことを明確にする。 ・全体の構成を考えて書く。 ・事実と感想、意見などを区別して書く。 ・引用したり図表、グラフを用いたりして書く。

以上のことと踏まえ、「目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力」を育てるため、本研究で設定するスキルを整理し、前頁表3に示す。

「目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出すスキル」「取り出した情報を使って書くスキル」を「29年解説」の指導事項と各学力調査の報告書に挙げられた指導のポイント等の内容を整理し、第1学年及び第2学年、第3学年及び第4学年、第5学年及び第6学年の3段階に分けて設定する。ここで示すスキル②はスキル①の内容も含まれ、スキル③にはスキル①、スキル②の内容も含むため、繰り返し指導を行い、定着を図る必要がある。

2 方略集の作成と活用について

(1) スキルを方略化するために

井上尚美(2007)は、言語活動を行う際、コツに当たるのがスキルであると述べている⁽¹⁹⁾。しかし、そのスキルを提示するだけで、児童が適切に言語活動を行えるようになるわけではない。そのため、井上(2007)は、「経験したことを言語によって意識化し、さらに、抽象化・一般化することによって、知識概念として頭の中に定着させる」¹⁾ことの大切さについて述べている。つまり、課題解決に至るモデルを経験しながら、その過程ごとに必要なスキルを取り出し、自分の言葉でまとめたり、分類・整理したりすることが、児童自身が適切に言語活動を行えるようになるために重要になる。

さらに、井上(2007)は、抽象化・一般化した知識概念を更に具体的な経験の場に下ろして繰り返していくことの大切さについて述べている⁽²⁰⁾。つまり、新たな課題解決の場を設定し、自分の言葉で整理したスキルを基に、児童自身がその過程で必要なスキルは何かを考え、選択して課題を解決しながらスキルに習熟することが必要になる。また、その過程で、スキルの有効性を感じさせ、スキルの定着を図ることが、児童が適切に言語活動を行えるようになるために重要である。

そこで本研究では、スキルを取り出す場面と取り出したスキルを活用する場面でそれぞれ課題解決の場を設定する。そして、取り出したスキルを使って新たな課題解決を行う際に、どの場面でどのスキルを使うと課題解決ができるか予想したり、実際に課題を解決したりして、スキルの有効性を実感している状態を、スキルを方略化できている状態とする。また、児童が書く過程で取り出したスキルを分類・整理し、まとめたものを方略集とする。

(2) 方略集の作成について

方略集の作成をする際には、課題解決に至るモデルを示しながら、目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く過程に沿って必要なスキルを取り出し、自分の言葉でまとめさせる。書く過程に沿ってスキルを取り出し、整理し、児童自身がまとめていくことで、スキルの意識化を図り、新たな課題と出合った際に、どのスキルが必要であるのか考える手段とさせる。スキルを取り出す際には、対話を取り入れながら、具体的な内容と結び付け、注目する点や思考の流れについて自覚を促し、別の課題解決の場面でも使えるようにまとめることを意識させる。

(3) 方略集の活用について

方略集の活用の際には、方略集作成時とは別の課題解決を行いながら、スキルの方略化を目指す。その際、新たなスキルに気付いたり、よりよい方略に気付いたりした場合は、方略集に加筆・修正を行わせる。児童自身が方略集の作成と活用を行うことで、方略の自覚や方略の有効性を実感し、使いこなすことができると言える。

このように、課題解決を通して、方略集の作成と活用を行い、さらに、方略集の加筆・修正を行うことによって、目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力が育つと考える。

以上、(1) (2) (3) から、スキルと方略化のイメージを図1に示す。

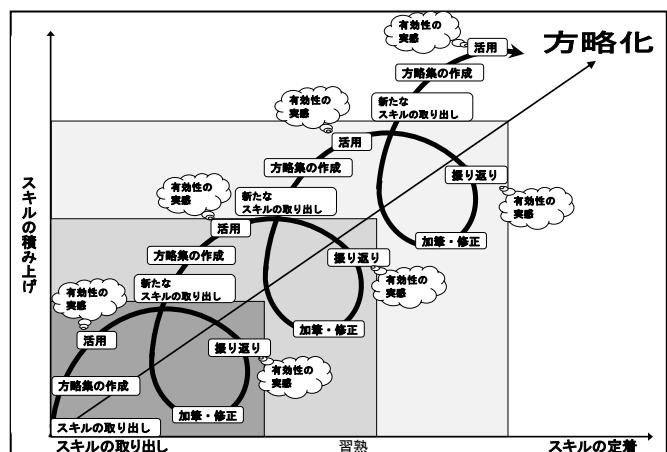


図1 スキルと方略化のイメージ図

III 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

書くことの学習指導において、児童が方略集を作成し、それを活用することで、目的に応じて複数の

資料から必要な情報を取り出して書く力を育成することができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表4に示す。

表4 検証の視点と方法

検証の視点	方法
○目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力がついたか。	プレテスト ポストテスト 事前アンケート 事後アンケート ワークシート
○目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力を育てるために、方略集の作成と活用は有効であったか。	

IV 研究授業について

1 研究授業の内容

- 期間 平成30年12月10日～平成30年12月19日
- 対象 所属校第4学年（1学級16人）
- 単元名 本で調べてほうこくする文章を書こう
- 目標

報告書を書くために、目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出し、分かったことを明確にし、自分の考えを入れて報告書を書くことができる。【書く能力】

2 指導計画（全11時間）

次	時	学習内容	方略集の取り出し	活用方略集の	振り返り修正
一	1	・教師の「報告書」や教科書の「報告する文章」を提示し、学習内容、単元のゴールを確認する。 ・本単元の学習計画を立てる。			
	2	・目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出すスキルについて学習し、方略集にまとめる。			
	3	・取り出した情報を整理して書くスキルについて学習し、方略集にまとめる。			
	4	・取り出した情報を整理して書く時に目的や場面によって様々な方法があることを方略集にまとめる。			
二	5	・報告書に書く題材を決め、方略を考える。 ・報告書を書くために必要な情報を収集する。			
	6	・収集した情報を整理し、報告書の組み立てを考える。			
	7	・組み立てメモをもとに、報告書を書く。			
三	8	・報告書を読み合い、友達の書き方のよいところを見付け、伝え合う。			
	9	・本単元の振り返りを行う。			

V 研究授業の分析と考察

1 目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力がついたか

検証を行うに当たり、「目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出すことができたか」「目的に応じて取り出した情報を使って書くことができたか」に分けて分析を行った。

プレテストは、平成27年度「基礎・基本」国語調査票五（目的や必要に応じて情報を取り出し、それらを関係付けて書く）の問題、ポストテストは、平成28年度「基礎・基本」国語調査票五（目的や必要に応じて情報を取り出し、それらを関係付けて書く）の問題を参考に作成し実施した。また、事前・事後アンケートを実施し、児童の意識の変容も見取る。

(1) 目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出すことができたか

目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出す問題における、プレ・ポストテストの判断基準を表5に示し、A, Bを基準に達しているものとする。また、その結果を表6に示す。

表5 目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出す問題におけるプレ・ポストテストの判断基準

A	目的に応じて複数の資料から必要な情報を全て的確に取り出している。
B	目的に応じて複数の資料から必要な情報を全て取り出している。
C	目的に応じて複数の資料から情報を取り出そうとしているが、落としている情報もある。
D	上記以外又は無回答

表6 目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出す問題におけるプレ・ポストテストの結果

プレテスト	ポストテスト				計（人）
	A	B	C	D	
A	7	0	0	0	7
B	4	0	0	0	4
C	1	0	2	0	3
D	1	1	0	0	2
計（人）	13	1	2	0	16

プレ・ポストテストの結果から、目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出せた児童が、11人（69%）から14人（88%）へと増加している。その中で、プレテストではC又はD評価であったが、ポストテストではA又はB評価になった児童は3人（19%）であった。その3人の振り返りの記述では、「どの言葉に注目するとよいのか分かるようになった。」「関係のある言葉に線を引いたり囲んだりすることと、言葉に注目できた。」とあった。

第一次で目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出すスキルについて学習し、方略集にまとめてることで、目的に応じて必要な情報を取り出すためには、「どんなところに注目すれば良いのか。」「何を意識すれば良いのか。」「どんな手立てを行えば複数の資料から必要な情報を取り出すことができるのか。」が分かり、目的に応じて複数の資料から必

必要な情報を取り出すことができるようになった。

これらのことから、目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出す力は高まったといえる。

(2) 目的に応じて取り出した情報を使って書くことができたか

以下は、目的に応じて取り出した情報を使って書く問題における、プレ・ポストテストの判断基準を表7に示し、Aを基準に達しているものとする。また、その結果を表8に示す。

表7 目的に応じて取り出した情報を使って書く問題におけるプレ・ポストテストの判断基準

A	目的に応じて複数の資料から取り出した情報を全て使い、順序を考えながら書いている。
B	目的に応じて複数の資料から取り出した情報の一部を使って書いている。
C	上記以外又は無回答

表8 目的に応じて取り出した情報を使って書く問題におけるプレ・ポストテストの結果

プレテスト	ポストテスト			計(人)
	A	B	C	
A	8	1	0	9
B	1	1	0	2
C	3	2	0	5
計(人)	12	4	0	16

プレ・ポストテストの結果から、目的に応じて取り出した情報を使って書くことができた児童が、9人(56%)から12人(75%)へと増加している。その中で、プレテストでB又はC評価であったが、ポストテストではA評価になった児童は4人(25%)であった。その4人の振り返りによると、「取り出した情報を整理して書くことが大切だと分かった。」「どの順番で書けばよいか分かるようになってきた。」と、文章を書く前に取り出した情報を整理することの大切さや、書くまでの手順について意識し、文章を書くことができるようになったといえる。

表9は、A児のプレテスト(C評価)・ポストテスト(A評価)の目的に応じて取り出した情報を使って書く問題の解答の変容である。下線部は児童が記述した部分である。

表9 A児の記述の変容

プレテスト	ポストテスト
わたしのおすすめは、「広島おこのみどん」です。 理由は、とてもかんたん だし、広島はねぎとかえい ようがあるから。 ぜひ、おうちでも作って 食べてみてください。	オランウータンの場合は、オランウータンのくらし ていた場所の「すみか」に合わせたし育のくふうをし ています。 オランウータンは、東南アジアのジャングルでくら し、木やツルを使っていどうします。 そのため、ツルのかわりにじょうぶなロープや消ぼ うホースをつるすぐふうをしています。

A児のプレテストでは、目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出す問題は正答していたものの、目的に応じて取り出した情報を全て使って書くことができていなかった。しかし、ポストテストでは、目的に応じて複数の資料から取り出し、取り出した情報を使い、飼育の工夫を紹介する文章を順序よく書くことができていることが分かる。学習の振り返りの際A児は、「方略集にまとめてることで、書くまでに何をすればよいのか分かった。」と記述していた。

これらのことから、目的に応じて取り出した情報を使って書く力は高まったといえる。

2 目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力を育てるために、方略集の作成と活用は有効であったか

(1) 授業の様子から

第一次で文章を書くまでに必要なスキルについて、「目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出すスキル」「目的に応じて取り出した情報を使って書くスキル」と分け、自分の言葉で方略集としてまとめてることで、児童自身が必要な情報を取り出したり、書いたりするために何が必要なのか、どの順番で考えていかなくてはいけないのか考えながら、スキルを整理し、方略集に加筆・修正することで、スキルを方略化することができた。その中で、どんな時も意識しなければいけないことが「目的」であることに、対話を通して児童自身が気付いていくことができた。図2は児童が作成した方略集の一部である。

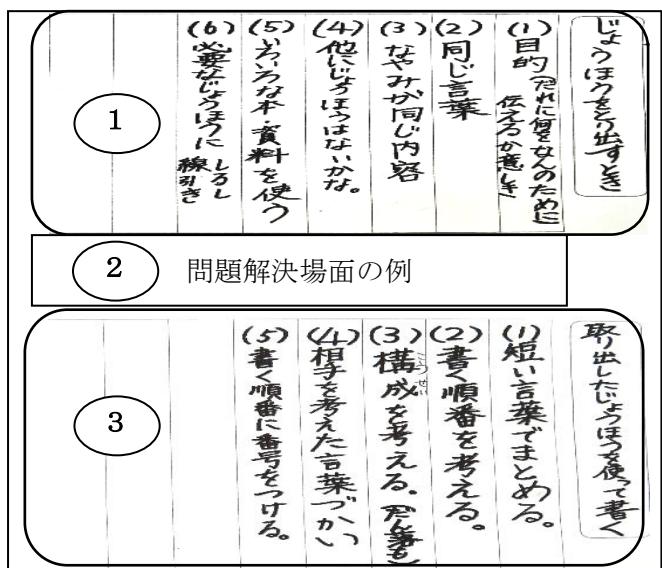


図2 児童が書いた方略集の一部

図2①の部分には、目的に応じて必要な情報を取り出すスキルを「わざ1」として、児童の言葉でまとめさせていく。今後、加筆・修正できるようにスペースを広く確保しておく。図2②の部分には、各スキルが具体的にどのようなものか分かるように、児童が資料に書き込んだものを添付しておく。図2③の部分には、①と同じように、目的に応じて取り出した情報を使って書くスキルを「わざ2」として、児童の言葉でまとめさせた。

そして、第一次でまとめた方略集を活用し、第二次では、報告書を書く学習を行った。学習のゴールを全体で確認した後、「自己の課題解決のためにどのような学習計画を立てるのか。」「自分に必要な情報は何なのか。」など、学習のあらゆる場面で第一次で作成した方略集を、授業の中で何度も見返しながら学習を進めていくことができた。



図3 方略集を基に考えた学習計画

図3①の部分には、第一次で作成した方略集を見ながら、第二次の学習計画を立て、図3②の部分にはどのスキルを使うか書き込ませてスキルを自覚させたり、振り返りをするときに活用させたりする。普段の授業では、受け身になりがちな児童も、方略集を基に自主的に学習を進める様子が見られた。

また、方略集を活用することで、課題解決に必要な手順やスキルを意識できるため、自分の書いた文章の良いところや友だちの書いた文章の良いところを見付けたり、伝えたりする学習活動をスムーズに行うことができた。

(2) 事前・事後アンケートの結果から

表10は、事前・事後アンケートの各項目の肯定的評価を比較し、児童の意識の変容をまとめたものである。

事前・事後アンケートの肯定的評価を比較すると、ほとんどの項目で、肯定的評価が30ポイント近く向上していることが分かる。その中でも、「文章を書

く時に、目的を考えながら書いています。」「文章を書くための情報収集をする時に、目的に合わせて、必要な情報だと思うところに線を引いたり、印を付けたりしています。」の項目では、事後アンケートで全員が肯定的評価をしている。

その結果、「書いた文章を友だちと読み合い、自分の書いた文章や友だちの書いた文章の良いところを見付けることができます。」の項目では、57%から94%へ、「友だちの書いた文章の良いところを伝えることができます。」の項目においては、37%から94%へと大きな伸びが見られた。これは、友だちの文章を読む際にも、どこに注目すれば良いか理解できた成果であるといえる。

表10 目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書くことについての児童の意識の変容 (%)

質問	事前	事後
文章を書く時に、目的を考えながら書いています。	69	100
文章を書く時に、目的に合わせてどんな情報が必要か考えながら情報を探しています。	69	94
文章を書くために情報収集をする時に、どのような言葉や内容に注目して本などで探せばよいか分かります。	56	88
文章を書くために情報収集をする時に、目的に合わせて、必要な情報だと思うところに線を引いたり、印を付けたりしています。	81	100
文章を書くために集めた資料の中から、目的に合っている情報はどれかを考えながら、言葉や内容に注目して仲間分けをしたり、短い言葉でまとめたりして情報を整理しています。	88	88
文章を書くために必要な情報を整理した後、どの順番で書けば読み手に伝わりやすいかを考えながら文や文章を組み立てています。	57	88
間違いを直したり、目的に合わせた表現になつていいか確かめたりするために文章を読み直しています。	50	88
書いた文章を友だちと読み合い、自分の書いた文章や友だちの書いた文章の良いところを見付けることができます。	57	94
友だちの書いた文章の良いところを伝えることができます。	37	94

表11は、文章を書く時に大切だと思うことについて事前と事後に意識の変容が見られた児童の記述である。

表11 文章を書く時に大切だと思うことについて

事前	事後
言葉づかいに気を付けて書くこと。	目的を決めて、その目的に合わせて書くこと。
誰が読んでも分かるように丁寧な字で書くこと。	「誰に向けて書くのか」など、目的を考えながら書くこと。
誰もが読みやすいようにしっかり書くこと。	文章を書くまでに書きたいことを短くまとめて整理したりすること。

文章を書く時に大切だと思うことについて、学習前は、漠然とした相手意識をもち、文章の体裁に気を付けていると回答した児童が多かった。しかし、

学習後には、書くまでのスキルについての記述が多くを占めた。これは、書くまでに必要なスキルをまとめ、方略集にしたことや、方略集の作成と活用の一連の流れを学習したことにより、スキルの有効性を実感し、文章を書く時のスキルを意識しながら文章を書くことができてきた結果といえる。

図4は、「文章を書くことは好きですか」における事前・事後アンケートの結果を示したものである。

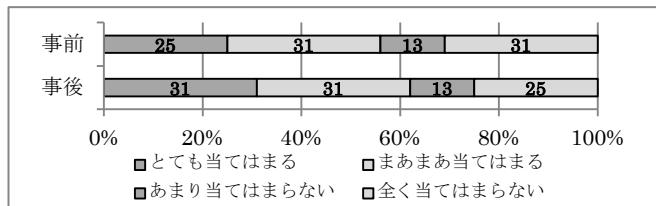


図4 「文章を書くことは好きですか」における児童の意識の変容

「文章を書くことは好きですか。」についての質問に対し、事前・事後アンケートの結果に数値的に大きな変容は見られなかった。「とても好き」「まあまあ好き」と回答している児童の中には、「わざブック（方略集）があるとこれから書ける気がするから。」「わざブック（方略集）を作っていくことで、文章を書くことが分かった気がするから。」と方略集の有効性を実感する記述が見られた。また、学習前は文章を書くことに対して、「めんどうだ。」「書くことは手がつかれるから好きではない。」と回答していた児童も、「文章を書くまでの順番は分かったけれど大変だと思ったから。」「少し文章の書き方が分かってこれから書けそうな気がするから。」とスキルを意識した記述や方略集の有効性を実感した記述に変化していることが分かった。

以上のことから、方略集の作成と活用は、「目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力を育てる」ために有効であったといえる。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

方略集の作成と活用を取り入れた学習活動は、目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力を育てることに有効であることが分かった。

2 今後の課題

書く問題において、プレテスト、ポストテストとともに、B又はC評価の児童が3人いた。共通してい

る課題は、目的に応じて取り出した情報が十分ではないことであった。これらの課題を克服するために、今後、以下の点について指導の充実を図る。

目的に応じて複数の資料から必要な情報を取り出して書く力を育てるために、低学年から繰り返し指導を行い、各スキルの習熟を図る。また、場合に応じて適切な方略を選択できるようにする。

書くことの学習だけでなく、話すこと・聞くこと、読むことの指導とつなげ、それぞれのスキルの関連を明らかにしながら、意図的・系統的に方略集の作成・活用を行わせる。さらに、カリキュラム・マネジメントの視点から、他教科等においても国語科で学習したことを活用できるよう年間指導計画に位置付け、資質・能力の定着を図る。

【注】

- (1) 中央教育審議会(平成28年)：『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』p.35に詳しい。
- (2) 文部科学省(平成29年告示)：『小学校指導要領』pp. 23-24に詳しい。
- (3) 文部科学省 国立教育政策研究所(平成30年)：『平成30年度全国学力・学習状況調査小学校国語』
- (4) 濑尾美紀子・植阪友理・市川伸一(2008)：『第4章学習方略とメタ認知』三宮真智子『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』北大路書房p. 61に詳しい。
- (5) 濑尾美紀子・植阪友理・市川伸一(2008)：前掲書 p. 61に詳しい。
- (6) 文部科学省(平成30年)：『小学校指導要領(平成29年告示)解説国語編』東洋館出版社pp. 101-102, pp. 139-140に詳しい。
- (7) 文部科学省 国立教育政策研究所(平成28年)：『平成28年度全国学力・学習状況調査小学校国語』
- (8) 文部科学省 国立教育政策研究所(平成29年)：『平成29年度全国学力・学習状況調査小学校国語』
- (9) 広島県教育委員会(平成28年)：『平成28年度「基礎・基本」定着状況調査』
- (10) 広島県教育委員会(平成29年)：『平成29年度「基礎・基本」定着状況調査』
- (11) 文部科学省 国立教育政策研究所(平成28年)：『平成28年度全国学力・学習状況調査報告書小学校国語』
- (12) 文部科学省 国立教育政策研究所(平成29年)：『平成29年度全国学力・学習状況調査報告書小学校国語』
- (13) 文部科学省 国立教育政策研究所(平成30年)：『平成30年度全国学力・学習状況調査報告書小学校国語』
- (14) 国立教育政策研究所教育課程研究センター(平成28年)：『平成28年度全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業アイディア例小学校』
- (15) 国立教育政策研究所教育課程研究センター(平成29年)：『平成29年度全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業アイディア例小学校』
- (16) 国立教育政策研究所教育課程研究センター(平成30年)：『平成30年度全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業アイディア例小学校』
- (17) 広島県教育委員会(平成28年)：『平成28年度広島県学力調査報告書』
- (18) 広島県教育委員会(平成29年)：『平成29年度広島県学力調査報告書』
- (19) 井上尚美(2007)：『思考力育成への方略-メタ認知・自己学習・言語論理-』明治図書p. 204に詳しい。
- (20) 井上尚美(2007)：前掲書p. 26

【引用文献】

- 1) 井上尚美(2007)：前掲書p. 26